

# 松本市教育研修センターだより

No.40 令和7年7月31日

## 「結」まつもと学びの日 ～みんなの未来の学校にむけて大切にしたいこと～

7月25日に「結」まつもと学びの日が開催されました。松本市音楽文化ホールへの参集とオンライン配信のハイブリッド研修となり、総勢1600名を超える教職員が参加しました。素敵な合唱から始まった「結」まつもと学びの日。曾根原教育長の講演、教育会教科等研究委員の発表があり、今年も大阪市立大空小学校初代校長木村泰子先生を講師にお招きし、これからの教育について考えました。

曾根原教育長と木村泰子先生から語られた「子どもたちの「いのち（生命と尊厳）」を何よりも大切に、子どもたちが自分らしく輝ける学校を、私たち教職員が共に創り上げていく」というメッセージは、私たちのこれからの教育者としてのあり方を問い直すきっかけとなりました。

今回は、お二人からのメッセージと参加者の感想をお届けします。

### 曾根原教育長のメッセージ 「みんなの未来の学校」

皆さんが子どもたちと向き合う中で、私は何よりも「いのち」を大切にしてほしいと願っています。ここで言う「いのち」は、単なる生命だけでなく、子どもたち一人ひとりの「尊厳」を意味します。子どもたちは私たち大人と同じ一人の人間であり、対等な存在です。だからこそ、時には素直に間違いを認め、謝る勇気を持ち、そしてどんな時も穏やかで明るい眼差しで子どもたちと接してほしいのです。イライラする時もあるでしょう。しかし、子どもの前では、子どもたちが安心して自分を出せる環境を常に意識してください。

社会は目まぐるしく変化しています。これまでのような「唯一の正解」を求める教育だけでは、予測不可能な未来を生き抜く子どもたちに必要な力を育むことはできません。これからは、自ら問いを立て、多様な情報から納得できる答えを導き出す「情報編集力」が求められます。子どもたちが主体的に学び、自らのペースで成長できる「個別最適化された学び」を、ぜひ授業の中に取り入れてください。



そして、松本市が目指す「みんなの未来の学校（ミンミラ）」は、子どもたちが「自分らしく、あなたらしく、ありのままに」いられる場所です。これは、子どもたちが大人に付度することなく、自分らしく輝き、同時に他者の個性も尊重し合える学校を意味します。そのためには、先生方の「時間創出」が不可欠です。授業準備や子どもたちと深く関わる時間を確保できるよう、共に工夫していきましょう。

子どもたちが自ら学びを調整し、未来を切り拓く力を育むこと。これが、これからの教育の最も大切な目的です。皆さんの情熱と創意工夫が、松本の子どもたちの未来を創ります。共に「ミンミラ」の実現に向けて歩んでいきましょう。

#### 【参加者の感想から】

- 子どもが自分で自分の未来をつくる（ミンミラ）というお話を聞いて、今、目の前にいる子どもが頭に浮かびました。進路指導をするにあたり、子どものために考えているつもりでも、子ども主体だったのか不安があります。子どもたちが自分の考えを語れるように、聴く姿勢を整えたいと思います。そのために、まずは子どもたちの話をじっくり聴く時間をもっと増やせるように、業務の無駄を省き、一緒にいる時間を増やしたいと思います。
- 教育長の講話では短い時間の中に「ハッ」とさせられることがたくさんあり、教師として、これからの世の中を生きる一人として、指導観を磨き続けなければいけないと思いました。

## 「みんなの学校」の木村泰子先生が松本市の先生方に送るメッセージ

皆さんは、日々子どもたちの未来を思い、学校という場で奮闘されていることと思います。しかし、今一度立ち止まり、問い直してみませんか？ 私たちの学校は、本当に子どもたちが「息ができる」場所になっているのでしょうか？

私がお伝えしたいのは、子どもたちを「型にはめる」のではなく、子どもたち一人ひとりの「ありのまま」を丸ごと受け入れ、その可能性を最大限に引き出すことです。宿題の目的も、いじめや不登校といった問題も、根っこにあるのは子どもたちが「自分らしさ」を発揮できない苦しさではないでしょうか。

子どもが問題行動を起こす時、私たちはつい「指導しなければ」と考えがちです。しかし、その根底には「この子はなぜ困っているのだろうか？」という問いかけが必要です。子どもたちの言葉にならないSOSに耳を傾け、彼らが安心して「しんどい」「助けてほしい」と言える関係性を築くこと。それが、子どもたちの自立心を育む第一歩です。

「普通」という言葉に縛られていませんか？ みんなと同じであることだけが「良い」という価値観は、子どもたちの多様な個性を奪ってしまいます。子どもたちの「違い」こそが未来を豊かにする宝物です。私たちは、その「違い」を否定するのではなく、むしろ伸ばしていく視点を持つべきです。そして、先生方は完璧である必要はありません。困った時、できないことがある時、素直に「助けてほしい」と周りに伝えられる大人でいてください。教頭先生や事務職員、用務員さん、そして保護者や地域の方々…子どもを取り巻く全ての大人が「みんな」でチームとなり、互いに支え合うことで、学校はより豊かな学びの場となります。



「やり直し」が保障される環境も不可欠です。失敗を恐れて何も挑戦できない子どもたちを育ててはいけません。失敗は学びのチャンスであり、そこから立ち上がり、再挑戦する経験こそが、子どもたちの生きる力を育みます。

残念ながら、日本の学校現場では未だに多くの「息苦しさ」が存在します。不登校やいじめ、自死といった数字が示す通り、子どもたちは苦しんでいます。しかし、私たちはこの現状を変えることができます。「子どもに困る子はいない」。この言葉を胸に刻んでください。子どもたちが困っているのではなく、彼らが「自分らしくいられない」環境にいるだけなのです。子どもたちの声を聴き、彼らの主体性を尊重し、彼らが「息ができる」学校を、共に創っていきましょう。

松本市の「みんなの未来の学校」を、子どもたちと共に作り上げていくことを心から願っています。

### 【参加者の感想から】

- 「自分の言葉で語ること」の重要性を改めて実感しました。思いや考えがあっても、それを自分の言葉にするのは難しく、語れないことで居づらさやつまらなさにつながる場合があります。子どもたちが安心して自分の言葉で語れるような環境づくりを、もっと意識していきたいと思います。
- 全ての子どもたちが安心して学校に来られるようになる、そんな環境作りが大切などだと改めて考えさせられました。変わっているから特別扱いするのではなく、その子がどうして困っているかその先にあるものを見ることが私たちの役目なのだなと思いました。
- 今不登校となっている子、特別支援学級に通級している子、保護者それぞれの立場になって考えたら、見方が大きく変わることわかっているようでいて分かっていなかった気がします。これが当たり前と考えていたことが実は多様な人の立場になってみたら違う見方であること、それを分かっていながら様々な理由にかこつけて認めてこなかった自分に気付かされます。子どもを主語にしてと言いながら、様々なしがらみにかこつけてやってこなかったことにも改めてふりかえらせられました。「これでいい」と思ったら、この仕事は終わりだと実感し、木村先生が言われたように日々これでいいのかと問いながら教員生活を過ごしたいと思いました。

お二人の話から、自分を見つめ、これからの教育について考える、とても大切な時間となりました。夏休み明けの子どもたちとの再会が楽しみになりますね。